
魔法少女リリカルなのは～聖王の血を受け継ぐ者～

久遠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜聖王の血を受け継ぐ者〜

【Nコード】

N4489K

【作者名】

久遠

【あらすじ】

時代は古代ベルカ。ベルカの国を納める王がいた。その名はオリヴィエ・ゼーゲブレヒト。新たな命が誕生したその生活から順風満帆に思えた矢先のことだった。当時、古代ベルカと敵対していた国がベルカに攻めはいいる。オリヴィエはその赤子を戦争に巻き込まれないためその赤子を異次元世界へと転送した。オリヴィエは転送を開始する際、あるデバイスを託したのであった。転送された先は遙か400年後のミッドチルダだった。拾われた一家に付けられた名前は“セツナ”という名前だった。

あらすじ（前書き）

始めて連載小説をやらせて頂くことになりました、久遠くえんと申します。
まだまだ、若輩者ですが、呼んで頂く方を樂しめて、おもしろい！
という目標を掲げて頑張りたいと思います。

あらすじ

時代は古代ベルカ。ベルカの国を納めていた王がいた。その名は、オリヴィエ・ゼーゲブレヒト。新たな命が誕生したその生活から順風満帆に思えた矢先のことだった。当時、古代ベルカと敵対していた国がベルカに攻めはいる。オリヴィエはその赤子を戦争に巻き込まれないためその赤子を異次元世界へと転送した。オリヴィエは転送を開始する際、あるデバイスを託したのであった。転送された先は遙か400年後のミッドチルダだった。拾われた一家に付けられた名前は“セツナ”という名前だった。

あらすじ（後書き）

まだまだ、駄文に近いですが、これから、もっと投稿できるように頑張りたいです。よろしくお願いします。作者の久遠でした。

プロローグ（前書き）

はじめまして、久遠くえんと申します。よろしく願います。

まだ、若輩者ですがご愛読される読者の方々様には、楽しさ、おもしろさを目標に掲げて、頑張りたいと思います。

今回の話はプロローグです。

赤子のセツナがベルカから転送され遙か、400年後のミッドチルダにてある一家に拾われます。

ある一家とは！？てば、本文をどうぞ。

プロローグ

時は古代ベルカ時代。ベルカの王からある命が誕生した。そう、オリヴィエ・ゼーゲブレヒトから生まれた赤子であった。

オリヴィエ

「頬がプニプニしてるゝ、可愛いねゝ♪」

彼女はベルカの国を納める王、オリヴィエ・ゼーゲブレヒト。この赤子は王からのお腹から産まれた。名前は決まっていない。なぜなら、聖王殿下が忙しいのだ。そして、オリヴィエは平和で暮らせること願っているのもつかの間。ベルカと敵対して国が攻め込んだできたのだ。オリヴィエは民の避難を勧告した。

オリヴィエ

「あなたと一緒に平和に暮らしたかったけど……。あなたをこの戦争に巻き込むわけにはいかないわ。」

オリヴィエは泣いていた。最愛の息子を戦争に巻き込むわけにはいかないと決心し、呪文を唱えて虹色のゲートが開いた。

オリヴィエ

「この先にあなたの世界が待っているわ。私が死んでも私はあなたの傍から離れないわ……。」

赤子は虹色のゲートに転送されていた。オリヴィエは最後の戦いをする為、聖王の方舟を起動させた。

― ミッドチルダ南部 某所 ―

ある二人組の親子がいた。親子は買い物帰りだったらしい。季節は冬。二人の親子が玄関前に着くと仰天したという。そう、そこには転送されてきた、古代ベルカのオリヴィエの赤子がいたのだから。??

「か、母さん！赤ちゃんがいるよ！？」

??

「あら！？本当！どうして、こんなところに・・・。」

息子から呼ばれた、母親は赤ちゃんを抱き締めた。赤子は嬉しかったのか顔の表情が柔らかくなっている。

??

「とりあいず、家に入りましょ。」

赤ちゃんはある二人組の親子によって拾われた。拾われた名字は、「ハラオウン」と書いてあった。

― 次の日 ハラオウン家 ―

??

「母さん、本当にどうしましょう？うちの前に赤ちゃんを置いていくなんて」

息子が疑問に思っていた。息子の名前はクロノ・ハラオウンである。

この一家の一人息子である。

??

「そうね……。管理局のデータベースにも登録されてもないし。おまけに搜索願いも出されてないわけだし。」

髪の毛が緑色の女性の名前はリンディ・ハラOWNという。時空管理局本局に勤める。優秀な魔導師である。

クロノ

「母さん。もしも、母親が見つからないとしたら、この子はどんなの？」

リンディ

「分からないわ。見つからないなら、こちらで保護するしかないわよ。」

クロノ

「保護されたら、事実上では僕の弟になるの？」

リンディ

「クロノ？もしかして、弟が欲しいの？」

リンディも思った。クロノは一人息子である。寂しい思いもあることがある。とリンディは思ったのである。

クロノ

「げきれば……。僕は弟が欲しい！」

リンディ

「……。！？分かったわ。3日ほど母親が出てこなかった場合はこ

ちらで保護し養子にしましょう？」
クロノ

「はい！！」

そして、3日がたった。赤ちゃんの母親は現れずに赤ちゃんはハラ
オウン家が保護し養子にして、戸籍を取った。家族会議の結果
名前はセツナと付けられた。

こうして、聖王の血を受け継いだ赤子はハラオウン家として、生ま
れたのである。正式名字名前

“セツナ・ハラオウン”と。

プロローグ（後書き）

どうでしょうか？ 幸い、あまり、文才がないので仕方がないと思いますが。ご感想など、アドバイス等、お待ちしております。

作者の久遠でした。

7年後の僕・・・（前書き）

第1話完成です。

後半ぐだぐだです。

試しに次回予告をやってみました。

今回のお話はセツナが7歳になりセツナが執務官になるという夢をもっています。では、本文をどうぞ。

7年後の僕・・・

僕が拾われてから約6年が月日が流れた。僕、セツナ・ハラオウンは今日で7歳になります。毎年、僕の誕生日を迎えるときは、毎年のように祝ってくれる。母のリンディ、兄のクロノで祝います。僕はうれしいです。

リンディ

「お誕生日、おめでとう、セツナ。」

テーブルにはバースデーケーキがある。恒例のろうソクを消した。クロノ

「お誕生日。おめでとう。セツナ」

セツナ

「ありがとう。クロノ兄さん。」

盛大な祝福を受けた。ハラオウン家には僕の誕生日を祝うために多くの人が来ていた。母さんの管理局の同期のレディ提督。ギル・グレアム提督とその使い魔のリーゼ姉妹などいた。なぜ、こんなにメンバーが多くいると言うと・・・。

ことの発端は2年前に遡る。当時、5歳だった僕だが、あるデバイスに話しかけらる。最初はどこから、しゃべっているか解らなかったけど、中指にはめられたリングであった。リングの中心には青いダイヤモンドがはめられたていた。

のちのち、母さんに調べて貰った結果、僕のデバイスだと判明した。僕の体内でもリンカーコアという物があります。試しに調べた結果がSランクだと判明しました。母さんに「将来、管理局に入っていない？」と言われ、僕は母さんやクロノ兄さんの仕事には憧れてい

たので承諾しました。で、その月から2年。魔法の勉強をリーゼ姉妹から教わりました。で、現在の自分が存在しております。管理局には就職年齢は7歳以上から入局可能ですが、現在は執務官の勉強をしているので来年になる予定です。ちなみに兄も執務官を目指しています。

グレアム

「最近はどうかね？ 執務官の勉強は？」

話しかけられたのはギル・グレアム提督。時空管理局本局で執務官長に勤める人。階級は提督。

セツナ

「はい。勉強自体は難しいのですが、いろいろと学ぶのが大変ですけど、勉強には成ります。」

アリア

「本当に呑み込みが速いね。私達の魔法の勉強なんか、2年で覚えるし。将来、クロノ越えるじゃない？」

と、答えるのはリーゼ姉妹のアリアねえさん。グレアムさんの使い魔で髪が長く、かわいい人だ。暴れん坊のロッテとは正反対だ。

ロッテ

「む、なにか失礼なことが聞こえたような気が……。」

人の心を読むとは……。恐るべし、リーゼロッテ。

レティ

「将来、本局運用部に欲しい人材だわ。」

こう言って話すのは髪が紫色で母さんの同期のレティ提督。本局運用部に勤める人。

リンディ

「まあ、この調子で頑張りなさいな♪愛しているわよ」

母さんが僕に抱きついてきた。実は、母さんはクロノ兄さんよりも僕に抱きついてくるのだ。たまにはリーゼ姉妹など。こうして、ハラウン家は平和に暮らしています。

??

「（マスターは幸せ者ですね。普通ならオリヴィエにお祝いしてもらうのですが……。立派になった姿をオリヴィエが見たら、オリヴィエは泣くでしょうね。）」

そうして、秘密に話しているのはセツナの中指にはめているリング状のインテリジェントデバイス、アロンダイト。セットアップ時は普段なら両手剣状態だか色々なフォームがある。戦いに寄れば、フォームに合わせて戦いが可能。

こうして、僕の誕生日会が終わった。僕も執務官の勉強を頑張っているが、このデバイス、アロンダイトと共に。

【次回予告】

8歳になった僕は兄さんと共に執務官資格をとり、念願の執務官という役職をとり、時空管理局に入局しました。9歳の時に第97管理外世界にロストログアがばら蒔かれたということでした。ミゼット提督の長期任務と小学校に入学するということになりました。そして、セツナはある運命的な少女に合う。出会った、セツナと少女の運命はいかに！？

次回 第2話

ジェエルシードに

セツナ

「ドライブニグニション!!」

7年後の僕・・・（後書き）

どうだったでしょうか？

感想、アドバイス等をお待ちしています。

次回予告も書いて見ましたが、まだまだ勉強不足ですね。

作者の久遠でした。

ジュエルシード（前書き）

かなり、グダグダです。

セツナは高町家に挨拶しに行きました。

ジュエルシード

次元世界・・・

この次元世界の第1管理世界に存在する、【ミッドチルダ】そして、この次元世界を纏める司法組織が存在する、その組織の名は【時空管理局】その組織の本局の一室

セツナ

「この書類はすでに見終わったので、ほかの部署に渡してきてください。」

セツナは女性に書類を渡した。女性は大きく返事をし執務室から出ていった。そう、セツナは1年前に執務官資格をとり、本局で働く優秀な執務官である。8歳で執務官資格を取るのは難しい。おまけに兄弟そろって、一発合格でセツナのことは天才魔導師と言われていた。

??

「お疲れ様です。セツナ」

セツナ

「リニスもお疲れ様。どうだった？武装隊の研修は？」

リニス

「はい。とても遣り甲斐がありましたよ。」

そう話す女性はセツナの使い魔、リニスである。リニスはセツナが8歳のときに倒れているところ発見し使い魔との契約を結んだ。そ

れ以降は管理局に入局しており、戦闘面、治療、補助系のオールラウンダーの魔導師に近いほどの優秀な使い魔である。

ピーーーー

ミゼット

『セツナ・ハラOWN執務官、ちよっとお時間、よろしいでしょうか?』

セツナ

「はい。何でしょうか?ミゼット提督」

通信モニターを開いた。そこなはニコニコしていた。老婆がいた。そう、その人は管理局で有名なミゼット・クローベル議長出会った。

ミゼット

『実はあなたに任務を任せたいのです。ロストログア、ジェエルシードについてです。』

セツナ

「ジェエルシードって最近、スクライア一族が発掘した奴ですよね?」

ジェエルシードは最近発見されたロストログアだ。

ミゼット

『はい。運んでいた輸送船が墜ちてしまったので、ジェエルシードは第97管理外世界にばら蒔かれとしまったのです。』

セツナは唇を噛んだ。噛んだ理由としては管理外世界は管理局は干渉してはいけない世界である。

第97管理外世界といえば、リーゼ姉妹の契約主である、ギル・グレアムの出身世界である。

ミゼット

『セツナ執務官にジェエルシードの回収任務を任せますがよろしいですか？』

セツナ

「はい。セツナ・ハラオウン執務官、任務受領します。」

ミゼット

『あ、もう一つ、言うことがありました。セツナ執務官には回収任務を行いながら、ある小学校に入ってもらいます。小学校にはあなたの母親、リンディ・ハラオウン提督が転入手続きをしないといてありましたのでご心配なく。』

セツナはハラオウン家から拾われてから魔法の勉強しかしていないので、こっちの世界でいう小学校には通っていない。しかし、向この管理外世界では、9歳にして昼間を出歩くのは不味いので、ある小学校に転入手続きを取ったのだ。

セツナ

「第97管理外世界。日本・海鳴市か。まさか、母さんがそんなこととしていたなんてね。」

リニス

「全くですね。」

僕もリニスも呆れていた。まさか、母さんがそこまでしていたなんて驚きだ。そして、次の日、僕とリニスは第97管理外世界、海鳴市に向けて出発したのである。

転送されたのはある公園だった。まだ明かりはまだ暗く、まだ夜明け前であった。

セツナ

「まだ、明かりは暗いね」

リニス

「まだ、夜明け前ですね。」

セツナ

「じゃ、転送途中に鍵を貰ったことだし、指定された住所へと行くか。」

リニス

「はい、分かりました♪」

僕とリニスは公園を出た。指定された住所に行くと、デカイマンションだった。思わず、びっくりしてしまった。鍵を開けてみるとテーブルには紙を添えてあった。

リンディ

『この小学校の転入手続きはしたわ。明日から学校生活、楽しんでね。リンディ・ハラウンより』

と書いてあった。

さて話は戻り、ロストログア、ジュエルシードについてだ。

セツナ

「青い菱形をした宝石の形状で詳しい数は分からずか……。魔力はA＋ランク。」

リニス

「願いを叶える石ですか……。放っていると次元震を起こりかねませんね。」

セツナ

「それを阻止して、封印する仕事が僕らの仕事だ。」

通信機など探索機などの設置で時間を喰ってしまった。朝5時に入って、今は空は明るい。

セツナ

「リニス。これから、ここに暮らすから御近所さんにも挨拶しなくちゃね。リニス、耳と尻尾は隠してね。」

リニス

「私は高性能の使い魔ですよ？それぐらい、当然です。」

セツナ

「とは言え、最初は維持することは難しかったんだけどね。」

セツナは契約した当初は維持するのが難しく、倒れる時もあったのだ。御近所さんに挨拶する為、準備した。

そして、近くの御近所さんに挨拶をした。リニスが殆ど挨拶している。（見た目の年齢は18歳に見える）挨拶が終わると大きな家が見えた。

セツナ

「リニス、気がついた？」

リニス

「はい。AAAランク級の魔導師ですね。なぜでしょうか？」

セツナ

「分からない。けど、関わっている可能性がある。警戒しよう。」

リニスがインターホンを押すと、茶色のみつ編みに大きなリボンをした女性と肩にイタチもどきに乗せた、ツインテールをした少女だった。

美由紀

「あのー、どちら様でしょうか？両親なら仕事でいないんですが？」

リニス

「あ、失礼しました。最近、ここに引っ越しして来ました。リニスと弟のセツナです。つまらないものですが、どうぞこれを。」

美由紀

「ありがとうございますって、男の子！？」

高町家の美由紀が大声を出した。セツナは髪の毛は薄いクリーム色の金髪で髪が肩より、すこし長いので女の子に間違えられるのはしょうがないと思い、セツナは苦笑していた。

??

「もう。お姉ちゃんたつら、私はなのは、高町なのはだよ。よろしくね？」

セツナ

「よろしくね。なのはちゃん」

笑顔で微笑んで、手を握って握手した。なのはの顔は赤かったという。姉の美由紀の提案で両親と兄は喫茶店に働いているので紹介したいといい始めたので、喫茶店に向かって、4人と歩いている。

――向かう途中の会話――

なのは

「セツナ君って、小学校行っていたの？」

セツナ

「いや、行っていないよ。僕んちは殆ど、家庭教師みたいだったからね。なのはちゃんはどんな友達がいるの？」

なのは

「えっと、同じ小学校で二人いるけどね。一人はアリサちゃんという人でリーダー的な存在。すずかちゃんは運動が好きなんだ」

セツナ

「へえ、そうなんだ。僕も運動好きだから友達になれるといいな。この国には可愛い女性がいるし、なのはちゃんもだよ。」

なのは

「ッ／／／」

前のリニスと美由紀はクスクス笑っている。と、高町家の喫茶店に着いた。名前は翠屋という。この町ではお菓子がおしく有名らし

い。そして、中に入るとレジ打ちしている男性がいた。

士郎

「いらしゃいま・・・って、美由紀達か。どうしたんだ？」

美由紀

「お父さん。実はね、後ろにいる人がハラオウン家が、うちの御近所に引っ越して挨拶してくれたんだ。」

リニス

「ご挨拶しなくちゃ不味いと思いましたので、セツナの姉のリニスです。」

セツナ

「セツナ・ハラオウンです。よろしくお願いします。」

士郎

「立派な子だね。僕は高町士郎。隣にいる女性は桃子、斜め後ろにいるのが息子の恭也だ。」

桃子

「可愛い子だね」

なのは

「お母さん、セツナ君は男の子だよ？」

恭也

「・・・冗談じゃ・・・なさそうだな」

恭也は女の子だと思っていたんだろう。一般人から言えば、十中八九、女と答えるだろう。

士郎

「学校は決まっているんですか？」

リニス

「はい。聖祥大付属です」

桃子

「あら、なのはと同じ学校じゃない!!」

なのは

「にゃ！？同じ学校、同じクラスだと言いね」

セツナ

「同じクラスになったら、よろしくね？なのは。」

なのは

「うん・・・／＼／＼」

こんな会話をしながら、約3時間ほどたった。僕とリニスはお世話になりましたと言い、家に戻って行った。

―― 時刻は夜 ――

家に帰った、僕とリニスは探索装置を見ていた。

リニス

「昼間もサーチャー掛けているんだけど反応ないですね……。」

セツナ

「そう簡単に見つからないさ……。時間を待ってみよう。」

さすがにそんな早くに見つからないことは覚悟はしていた。と途端にアラートが鳴り響く。

リニス

「セツナ！！ジュエルシードの反応がありました！！場所はこの近くの神社です！！近くには魔導師がいます！！」

セツナは直ぐさま、ベランダに出た。肉眼で確認できる。大きな樹が暴れていた。

セツナ

「リニス。こちらでも確認できた。行ってくる。」

リニス

「はい。分かりました！！」

セツナ

「アロنداイト、セットアップ！」

アロン

「スタンバイレディ、セットアップ」

セツナは中指にはめていた。そこから、青い光に包まれ、バリアジヤケット（三国無双4の趙雲を創造してください）手には両手剣が握られていた。セツナは暗闇に染まった夜へと駆け出して行った。

【次回予告】

セツナ

「夜を駆け出した僕」

なのは

「私が魔導師として、出会った少年」

セツナ

「そこにはある少女がいた」

なのは

「少年の目的はなんなのか？」

セツナ

「次回！出会ったは突然に」

セツナ・なのは

「「ドライブイグニション！！」」

ジュエルシード（後書き）

後半はグダグタです。

ご感想、アドバイス等お待ちしております。

作者の久遠でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4489k/>

魔法少女リリカルなのは～聖王の血を受け継ぐ者～

2010年10月10日22時52分発行